

エッセー

かくして陸軍山砲隊 武田曹長、生還せり

武田 婦美

二〇一〇（平成二二）年春、十年間も一人暮らしを続けていた父が突然心筋梗塞で倒れ、日赤病院に担ぎ込まれた。一時はどうなることかと心配したが、九十二歳という高齢ながら容態は快復し、家の近くの特別養護老人ホームに入所するまでになった。

残された実家の中は、勝手気ままに生活してきた父の身の回りの雑多な物で溢れ返っていた。若い頃、厳しい軍隊生活を体験していたこともあり、元来几帳面だったはずだが、母を五年前に亡くしてから次第に身辺が荒れてきていた。

ベランダだったところを改造した父の書斎は特にひどく、書物や書類その他もろもろの紙類が散乱していて、どこから手を着けていいか迷ったほどだ。

その中から妙なものを発見した。一つは大判の封筒に入った古い手紙類で、「戦友から」という表書きがあるもの。二つ目はその戦友らしき人物の書いた手記三冊。一番分厚い本で二百ページほどのもの、表題は『山砲隊物語 山砲兵第七十一連隊第一中隊』（著者 亀岡進一）とあ

り、その続編として『山砲隊物語 パガン島のその後 パガン島守備独立混成第九連隊 山砲兵第一中隊』という三十ページほどの薄っぺらな冊子。そして最後の一冊が、『パガン島守備隊』（著者 滝澤國男）で、これまた五十ページ足らずの戦記であるが、この滝澤氏こそ「戦友」の紙袋中で一番多い手紙の主であった。

我が家では母が戦争ばなしを嫌ったので、父の戦争体験が話題になることはほとんどなかった。それでも子どもたちの質問には率直かつ真面目に答えてくれたおかげで、父が中国の東北部で兵隊さんだったこと、戦争が終わった時は南洋の孤島にいたことだけは知っていた。

たしか私が高校生だった頃だ。社会科で日本史を履修した時、その日本史教師が「奈良・飛鳥時代」に手間取ったため（高松塚古墳の壁画が発見されたのが一因）、現代（大正・昭和）のところまで行き着かず、一九二九年の世界恐慌あたりから生徒の自学自習となってしまった。まことに大ざっぱな話だが、昭和四十年代頃の古き良き時代である。受験生の私たちは教師の

七面倒な授業がないことをむしろ歓迎し、さっそく歴史事項の暗記に取りかった。しかし、しかし、である。翌々年の一九三一年から一九四五年までの十五年、そのたつた十五年間の暗記事項のなんと多いこと。それに、似ているものも多い。満州事変と上海事変。五・一五事件と二・二六事件。日中戦争と第二次世界戦争と太平洋戦争（大東亜戦争とも）。それらは全て戦争がらみのものばかりである。

その時ふと思いついて父に尋ねた。「お父さんが兵隊だった中国東北部って、満州のこと？」父は面映ゆい顔で答えた。「そうじゃ。わしは陸軍、関東軍の兵隊じゃった。」と。

そうだったのか。あの関東軍の兵士だったのか。野間宏の『真空地帯』や大岡昇平の『野火』『レイテ戦記』が若者たちに読まれていた時分である。我が父が満州で何をやってきたのか、詳しくは知らない。が、いやむしろ知りたくはなかった。なんだか面倒な話が出てきそうだったからか。いや単に受験期で忙しかっただけかもしれない。



武田清28歳、妻・秋野25才
1921年4月16日撮影

さて、二〇一〇年も暮れようとする頃、やつと実家の中の整理も一段落ついた。というので、私の家を持ち帰った三冊の戦記を読むことにした。また、「戦友から」の袋の中の、手紙やハガキなど六十数通も差し出し人を照合し、まとめてみたところ、やはりそれらは父の「戦友」たちのものだった。

しかし、ざっくり読んでみたが、話の内容がイメージとして湧いてこない。何度読んで、文字が頭の上を素通りするだけだ。徴兵検査も召集入隊も軍隊の組織も、確かに文字として読んでいるのに、実感が伴わない。これはいくら読み返してもだめだった。これにはあせった。

そこで岡山市の図書館と県立の図書館に通って、まずは父の属していたという「関東軍」について何冊か読んでみた。そのうち面白かったものをあげてみると『関東軍』（講談社 二〇〇〇年二月発行）で、著者は中山隆志氏（陸上幹部学校戦史教官室長。もつとわかりやすかったものでは『別冊歴史読本関東軍全戦史』（新人物往来社 二〇〇一年五月発行）。この本のあとがきに山本七平氏の説としてこう記されている。

「統帥権により日本国の三権から独立していた関東軍は、逆にまず日本国をその支配下に置こうとした。そして満州事変から太平洋戦争に進む道程を仔細に調べていくと、帝国陸軍が必死になって占領しようとしていた国は実は日本国であった。」と。

へえ、そんな大それた野望を持っていたのか、関東軍および帝国陸軍は。しかしうちの父がなぜそんな（今となつては滑稽な？）軍隊にいたのだろうか。その経緯を知りたいと思った。父と同郷の兵士たちはどうなのだろうか。どういう思いで兵士となり、戦地で戦つたのだろうか。図書館の片隅にある郷土資料コーナーにはそんな兵士や下士官の「戦記」というか「手記」のような本がかなりの数、残されている。数ある従軍記のどこまでが事実かを検証するとき、事実そのものをとやかく言うより、兵士であった本人の記憶の底に激つた感覚、それが本人にとつての事実として受けとめてやりたいと思うよ

うになった。

そうして二、三か月のうちに読み漁つた「戦史」の中でいいなあと考えたものを少し挙げておきたい。（断つておくが、これはあくまで私の勝手な推薦であつて、本そのものの価値はまた別である。）

（一）『一兵士の戦争体験 ビルマ戦線生死の境』（著者 小田敦巳）

著者の小田敦巳氏は一九二二（大正一一）年岡山県赤磐郡熊山町に生まれ、山形県米澤高等工業学校（山形大学工学部の前身）を卒業し、一年間の会社勤務の後、一九四三（昭和一八）年臨時召集により姫路にあつた「露洲」連隊に入隊する。露洲というのは弾薬や食糧その他戦闘に必要な物資を輸送する兵科で、氏の専門である無線・通信とは全く無縁の部署である。おまけに幹部候補生の試験は外地派遣の部隊にしかない、ということではビルマに渡ることになった。当時、中学校卒業以上の学歴があれば、幹部候補つまり将校になれる道が開かれていたのだ。しかし、上陸したビルマの地は試験どころか、予想だにしない死闘激戦が待ち受けていた。結局、氏は陸軍「露洲」連隊として終戦を迎える。この間の凄惨極まる状況はなんと形容したらいいのだろうか、語る言葉を持ち得ない。

（二）『赤いチューリップの兵隊 ある兵士の足跡』（著者 佐藤寛二）

著者の佐藤寛二氏は一九一五（大正四）年岡山県川上郡成羽町に生まれ、岡山県高梁中学校卒業後、西大寺税務署に勤務していた。なかなか召集が来ないので、一九四〇（昭和一五）五月に結婚した。ところがその五か月後に応召され、姫路の野砲兵第五連隊に入営。同年十一月中国の北京近くの塘沽港から大陸に入り、以後一九四六（昭和二一）年一月に復員するまで中国各地を進撃する。氏の部隊はその後野砲第一一〇連隊、また後には独立野砲二連隊と名称は転々と変わるが、部隊の標識は「赤いチューリップの花」だった。經理の専門をかわれて連隊本部の事務室勤務だったので、比較的平穩な日々だった。姫路の初年兵時代は俸給一日十八錢、月五円四十錢が現金で支給されるが、使い道もないので全額郵便貯金にしたものが……、中国大陸を転戦するうちに悪所通いを覚えたらしく、内地に残した新妻のもとにお金の無心をするようになっていく。曰く、「昭和一九年の元旦は武漢大学の仮兵舎で迎えた。……兵隊にあって最大の問題である慰安所は、蛇山公園の麓と武漢大学の門の前に数軒あった。」と。終戦時の階級は伍長、復員時には軍曹となっている。

(3) 『満州の思い出』(著者 中嶋達二)

著者の中嶋達二氏は一九〇四（明治三七）年岡山県邑久郡邑久町に生まれ、岡山医科大学（現岡山大学医学部）を卒業後、しばらく学内で研究生活を送るも満州鉄道からの医師募集に応じ

て「新しくできた満州国を見て歩くのも面白ろう」という軽いノリで中国に渡る。時に一九三六（昭和一一）年、家族は中嶋氏三十一歳ほか、妻二十六歳、長女二歳、生後四か月の長男、その他に「ヘソ」という名の英ポインターの雑種を連れていった。氏は正式には南満州鉄道株式会社の社員であり、付属病院の医師という身分である。しかし、内地からわざわざ猟犬を連れて渡満していることからわかるように、安東、撫順、敦化と、満州の任地を転々とするうちに銃猟を始め、ハルピン、新京、そして昭和二十年の終戦時の吉林までの七年間、猟期中の日曜日には、どんなに寒い日でも猟にでない日はなかったほどに熱中するのであった。獲得した獲物はおよそ二千六百、そのうち雉が一番多くて一〇三五羽、その他は鴨・雁・鴨・鶉・山七面鳥・兎・狐・狸……ええい、中島先生はなにをしに満州くんだりまで行ったんですか。まさか当初から猟が目的では、と勘繰りたくもなるのだが、敗戦後は当地で築いた猟友関係を始め、その広い人間関係が氏や氏の家族及び周囲の日本人の身を助けることになる。豪放らしい落な気性の氏の交友は関東軍の幹部や現地のロシア人、満州開拓団の人々、満人にまで及び、面白いところでは蒙古の南ゴロス王府の王様の往診をしたこともある。だが、やはり圧巻は敗戦から翌昭和二十二年七月に内地に引き揚げるまでの出来事であろう。医師という立場から体

験した満州国崩壊後の日々はまさに生きるための戦いの連続であった。

さて、これらの戦争体験記は、自分の命をも懸けた日々の忘れ難い思い出を後世に残しておきたいという強い意志が感じられる。しかし、その思いはあってもどのように表現していいかその表現の手段を持ちえなかった多くの人々、ましてや、あえなき最期を遂げた名も無き兵士たちはどういった気持ちだったか知るよしもない。一九六四（昭和三九）年、厚生省援護局が発表した統計資料によれば昭和十二年から終戦までの八年間だけでも、死者の数は陸海軍あわせて三百二十万人にのぼるといふ。それら声無き声の兵士たちの戦いの実体はどんなものだったのだろうか。いまとなつては知り得る手段はないが、それではせめて生き残った兵士たちはどうなのか。先に挙げた(二)の著者である小田敦巳氏は復員後岡山県の職員として、専門の電話回線や無線通信部で業績を挙げた。また(三)の佐藤寛二氏は税理士として、また岡山商工会議所議員として活躍。(四)の中嶋達二氏も郷里の邑久町で医院開業という、それぞれに地方の名士として戦後を生き、自分の足跡を書き残している。私はこれらの戦記を読みながら、戦記を残していないその他の兵士たちの声を聞きたいと思つたところ、そんな私の思いにどんびしやりの本が存在したのだ。これぞ名も無き兵士たちの「遺

言」の書である、というものが。

『昭和の遺言 十五年戦争 兵士が語った戦争の真実』（仙田実。仙田典子共著。仙田実氏は地方史研究者として著名な方だそうだが、恥ずかしながら浅学の私は全く存じ上げていなかった。この本は氏が郷土の名も無き兵士たちから聞き取った「昭和の遺言」、戦争体験の真実である。父たちが如何に戦争の時代と立ち向かい、如何に戦い、如何に生きて還ったか。私はここではじめて一人一人の生きた兵士の顔を見るこ
とができた。

ちなみに私が「岡山・十五年戦争資料センター」の存在を知ったのもこの『昭和の遺言』のおかげである。本のあとがきで著者の一人である仙田典子氏の紹介から、この市民グループの活動を知ったからだ。

ちょうどその頃、実家から一通の書類が出てきた。今から二十年ほど前の昭和五十五年、時の県知事長野士郎氏あての履歴書で、「旧軍人、軍属の加算年計画書」という紙が添付されている。どうやら父が岡山県の警察署を退職する時、恩給を受けるために提出されたものらしい。この書類が手に入ったことで、父の軍隊での足跡が一気にはつきりしてきた。「履歴書」には任官進級の年月日、その在職年関係その他が簡単に記されているのだが、それに戦友たちからの書簡や戦友の書き残した戦記で肉付けしてあげばいい。この作業は私の知らなかった若き日の

父の実像を暴くようで、なかなか愉快だった。以下、その肉付けしたものの全容である。

「履歴書」

本籍地 岡山県岡山市上出石町六六

現住所 (記載なし)

氏名 武田 清

生年月日 一九一八(大正七)年三月十八日生

一・兵隊になる前の、

ただの間人だった頃

武田清は岡山市北区出石町の、旭川を挟んで後樂園、その向こうに岡山城を臨む地区に生まれた。武田家のもと岡山池田藩の下級武士の家柄で、祖父の代で分家したため士族を離れ、平民となった。父武田八太郎、母満喜の三男で、下に第二人、妹二人の七人兄弟である。番町にあつた本家から出石町に移転した大正・昭和の頃が、我が武田家の一番苦しい時代だったらしい。三男坊の清は尋常小学校を出ると、岡山市立商業学校(岡山南高校の前身)に入学。この進路選択は自分で決め、自分で願書を出し、自分で学費を払って通ったのだという。そのため
に在学の三年間、山陽新報(現在の山陽新聞)の夕刊配達をはじめ、学校の休みには森下町にあつた「川口米穀店」で米俵の運送など、アル

バイトに精を出した。市商を卒業した後はその川口商店に就職したのだが、半年後の昭和九年九月の室戸台風の襲来で岡山市街地が浸水、集配所の米の冠水騒ぎで、店は倒産寸前となり、清はリストラされてしまった。しかし、捨てる神あれば拾う神あり、米の配達先のお得意さんの中に岡山郵便局に勤める人がいて、その推薦で郵便局の集配手の職を得た。清にとつて、この郵便配達の仕事は性に合っていたらしく、昭和十四年二月に召集令状で軍隊に取られるまで続けた。

二・軍歴について(昭和一四年〜昭和二〇年)

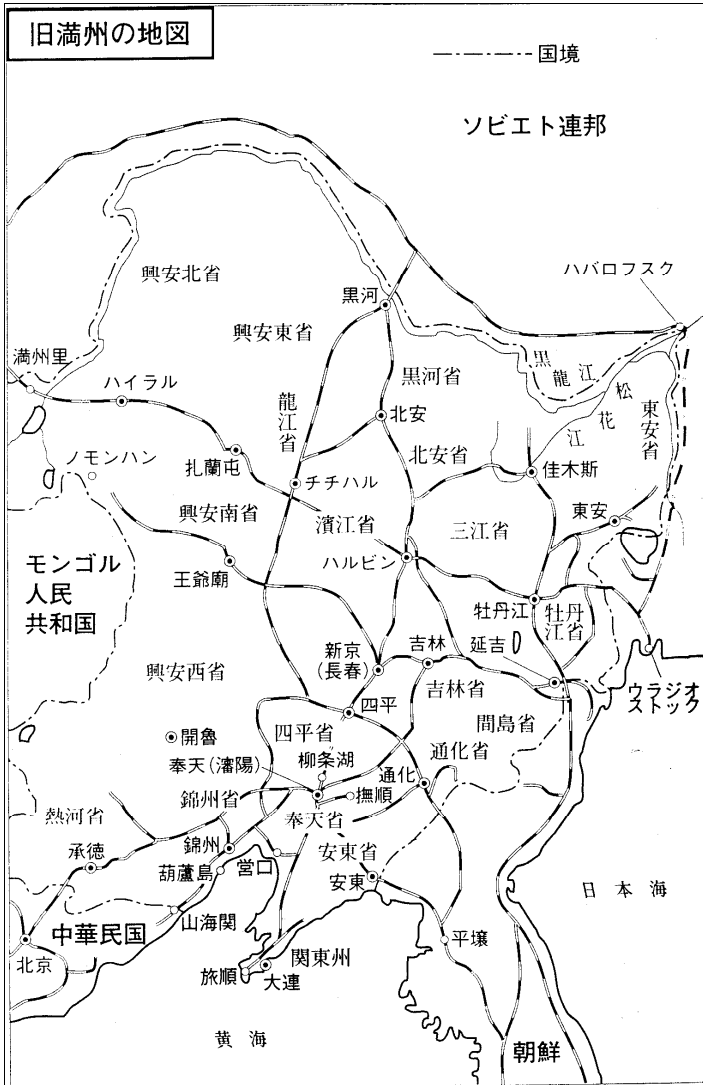
(1)一九三九(昭和一四)年、二十一歳

▽三月五日 砲兵二等兵となり、現役兵として満州暉春県暉春駐屯山砲兵隊に入営。

▽九月一日 砲兵一等兵となる。

▽十一月二九日 阿城関東軍砲兵下士官候補者隊分遣のため暉春出発、二月一日阿城着入隊。

父の武田清がどうして山砲兵になったのか定かではない。おそらく、当時の若者の中でも体格だけは頭抜けて立派だったためだろう。なにしろ幼少期から生家の前の旭川をプールがわりに泳ぎまわっていたし、市商時代に体育学科で覚えた「相撲」が特技、おまけにアルバイトで



米俵を担いでいた男である。この山砲兵という兵種は彼にとつて的を射た部署であつたことだろう。

入営地の暉春は満州国間島省にあり、首都は延吉。この延吉は行政の中心地であり、軍政的には第一方面隊、第二軍司令部の所在地。清の砲兵隊は第七一師団でこの下にある。暉春（中国読みでフンシュン）は人口二万人、近くの街訓戒まで一〇キロ、ソ連満州国境にある北チクロ山、馬鞍山まで直線距離にして三〇キロ、

文字通り「国境の町」（東海林太郎の流行歌）そのものの辺境の地である。駐屯地の近くには「朝日開拓団」「青森開拓団」の部落もあつた。

山砲隊のうち第一、第二中隊は暉春に大隊本部とともにあつたが、清の属した第三中隊だけ土門子という農村にあり、兵舎は満人家屋の改造したもので、炊事洗濯場、事務所と幹部宿舍、そして立派な厩舎、練兵場があつたという。ここでは初年兵の教育も国境守備を兼ねてやられており、ちょうど彼が入隊した二か月後に勃発

したノモンハン事件にも馭者として国境線まで出動した。

このノモンハン事件について当時満鉄ハルビン病院の内科医長として勤務していた中島達二医師（『満州の思い出』の著者）の貴重な証言がある。

「……ノモンハン事件は五月二八日から始まった。結果は関東軍に不利で、戦車を中心とする圧倒的優勢なソ連機械化部隊によって関東軍は完敗したのである。しかし、この敗戦は極秘にせられ、負傷者を陸軍病院へ収容するのに、人目の多い昼間を避けて夜間のみ輸送した。

……しかし、負傷兵の輸送は夜間のみではさき切れず、数日後には朝となく夜となく輸送が続けられ、ハルピン駅構内は負傷兵で一杯になつていと教えてくれた駅員がいた。」

また『赤いチューリップの兵隊』でもこんな記述がある。

「ノモンハンの生き残りだという上等兵がいた。ノモンハンの戦場から帰った兵隊は、軍当局もその処置に困って、各中隊に一人あて配置したのかもしれないが、本人は相当ひがんでいたようであつた。」

それにしても、兵隊さんになってわずか二か月で、こんな戦いである。もつとも清の部隊が哈拉爾（ハイラル）の南方約百五十キロのノモンハンに到着する前に戦闘は決着しており、実戦には参加していない。しかし、この事件が彼



防寒服の清

に与えた影響は大きく、後々まで軍部に対する「疑念」は残った。関東軍のズサンな作戦に対して「何をやっとするのか」という不満である。軍の規模だけは大いだがその内実は張り子の虎ではないかという疑い。(もちろんこうした不穏な思いは心の奥底に封印してしまっただが。) だが暉春に帰隊するとまもなく、内務班の班長から班の日誌記帳係を命ぜられた。内務班というのは初年兵が軍務教育の期間、共同生活を送るところで、一人前の兵士をつくるために厳しい日常訓練が課せられていた。ここではわずかのミスも許されず、全体責任という名目のもとで連日のように共同のビンタがあった。しかし、記帳係になると、その連帯ビンタからははずされる。「運がよかった。ビンタの数は減った。」と後に語っている。軍隊というところはとにかく理由のない制裁が多かったという。清にとつてさらに運のいいことは、暉春川での軍馬による渡河訓練で、河を渡り切った唯一

の初年兵になったことだ。もともと、体力気力が抜群の彼のこと、馬との相性も良かったのだろう。選抜されて阿城にある砲兵下士官候補者隊に入隊することになった。いわば兵隊の出世コースに乗ったのだ。

この阿城は十二世紀初頭に興った金の国首都だった古い街である。『思ひ出の満州』によると「街の東方には重砲連隊と学校があった。その連隊の出入店がソ満国境の重砲基地というわけで、ここにはまた砲兵情報連隊と関東軍砲下士官候補者隊というのが駐屯していた」とある。

この重砲兵連隊の隊長というのが狹キチ中島医師のお仲間で、ある時ソ満国境の視察が終わって余暇が出来たので雉撃ちに行き、獲れた獲物を連隊の下士官以上の家庭に一羽づつ配ったとのこと。当時の満州はまだ戦雲遠く、のんびりしたものであった。

(2) 一九四〇(昭和十五年)、二十二歳

▽三月一日 陸軍砲兵上等兵となる。

▽九月一日 陸軍兵長となる。

▽十一月二五日 砲兵教導学校卒業、同二九日暉春の原隊復帰。

阿城での下士官教育は約一年間だった。この間に階級が二つ上がって、兵隊の位では最高の兵長である。我が家に残っている真っ黒い「兵隊アルバム」(表紙に兵士が二人、戦闘の合間に休息を取っているレリーフのあるもの)にはこ

の阿城時代の戦友たちとの写真がある。当時、兵士たちは互いに記念の写真撮りあつて交換している。この一葉の写真に写っている時点ではこの自分という兵士は存在していた、ということを実証するためにか。若かりし武田清は元氣溼測、兵士としての青春を謳歌(?) しているようにも見える。

(3) 一九四一(昭和十六)年、二十三歳

▽一月一日 陸軍伍長となる。

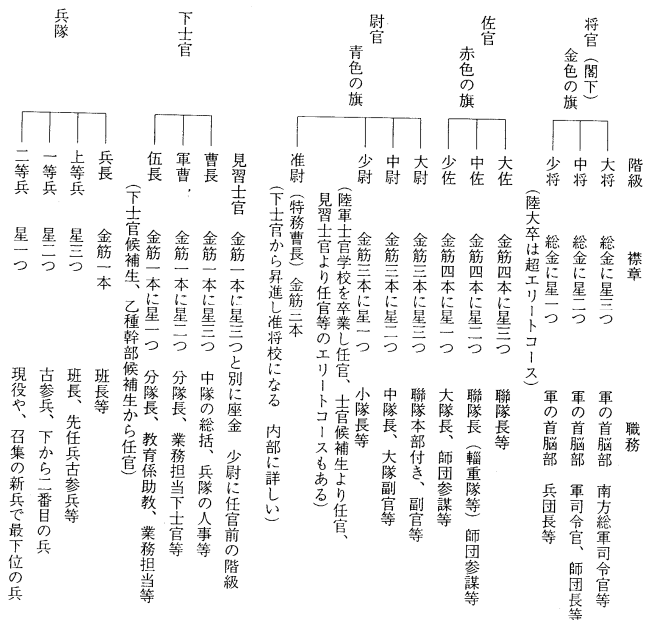
この「伍長」という階級は下士官の最下級の位だが、これでやっとなだの兵隊から初年兵の教育係の助教という役割が与えられる。阿城から帰隊した翌三月、初めて部下を持つこととなった。その部下の一人が『バガン島守備隊』という本を書いた滝澤國男氏である。以下、彼の手紙の抜粋。

「昭和拾六年二月、もうずい分遠い昔の事に成ってしまいました。(この手紙は昭和六十年一月の消印あり。)満州国暉春駅頭はまだ夜明け迄は間のある暗く寒風の吹く広野の地でした。私たちは厚い防寒服に身を包み、第三中隊の指揮責任者である大場景虎曹長(後准尉)に引率され、暉春駐屯山砲隊の衛兵整列の前を宮庭へと入隊したのでした。

私たち十六名は、第三中隊(中隊長葛西学淳中尉)第一内務班(班長武田清伍長)の班でし

た。確か武田班長は私たちから数えれば三年兵殿であり、阿城の教導学校を卒業したばかりのことで、忘れる事はないと思われます。第三中隊の初年兵教育が始まり、本科の教官には鈴木少尉、助教下士官には三宅軍曹、武田伍長、観測通信教官には原田少尉で、助教は天間軍曹、管軍曹が当たり、馬教育は阿倍軍曹、事務室には菅原准尉や大堀軍曹、桜井軍曹など、優秀な尉官、下士官が揃っておられたことを記憶して

資料一 陸軍の階級制度概要



います。

私たち第一内務班の初年兵は理解ある武田班長で、他の班からとても羨ましがられたものでした。夜の点呼時、隣の天間班長は大きな声で兵をどなり、助教の円見伍長はやたらビンタを加えていました。武田班長殿は皆が飲み込めるような話で軍人精神を教え、むしろ二年兵に気合いを入れていました。そのような班長の行動は初年兵の眼には神様の如く感じ、一班と二班では天国と地獄だと蔭で兵隊は話し合ったものです。」

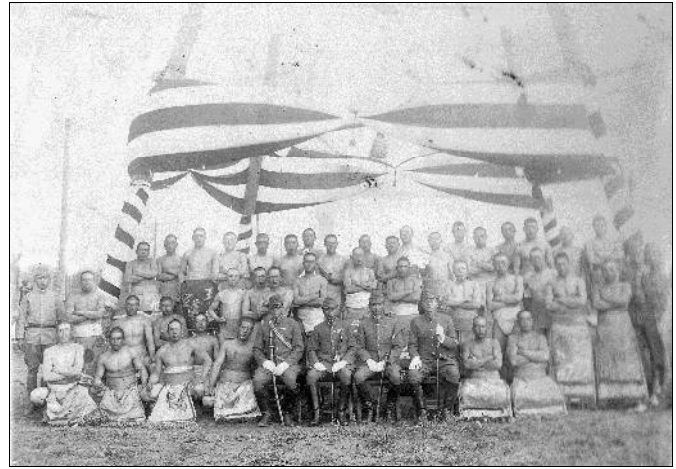
ここで山砲について少し調べたことを述べる。日本軍が用いた大砲といえば、野砲兵隊が持っていた加農砲(大砲)と榴弾砲があるが、口径十センチのものでこれを野戦で使う。これより大きい砲は重砲兵隊の大砲でこれは口径が二〇センチ・二十四センチもあり、敵のトーチカを潰すのが任務である。山砲はこれらの大砲よりも小型で口径七・五センチ、丘陵地や山岳地に適した砲で、バラバラに分解して馬に牽かせて運んだ。当時使われていたのは九四式山砲という一九三五(昭和一〇)年に完成したばかりの新型山砲。総重量は五百キロ以上もあり射撃性能は

初弾で一五〇〇メートル先を命中させることもできるという。

山砲隊の訓練は兵士の志望によって三つの兵科の班に分かれる。本科の砲手班は六人が一組で、射撃の基本操作の訓練が行なわれた。たとえば、各砲手の連携操作は、一番二番手は車輪に、四番五番手は後脚につき、二番手の信号で砲の位置が決まると、一番手が砲尾を開き、四番五番は弾丸を準備して三番に渡す。装填がすべて完了すると、「撃て」の合図で一番は拉縄を引く。

その他の兵科としては通信班・観測班があるが、中隊全体では馬の世話や調教が兵士にとつては一番大変な任務だっただろう。なにしろ、生まれて初めて馬に触ったという兵士も多く、厩舎の掃除や馬の手入れなどに苦労することになる。慣れない仕事でヘマをすると、受け持ちの教育兵からビンタが飛んだ。

「第一内務班(武田班)の中で、観測では中隊一の高橋や五味、通信では鈴木、本科では染谷、内山、長田、花岡など中隊でも優秀な部に入る部下を持って武田班長もさぞ鼻が高かった事と思われます。」と滝澤國男氏は書いています。その滝澤氏自身は通信班に属しましたが、軍隊生活にはなじめない、しゃべっ気の多い人間だったため、一番大事な初年兵時代に遅れをとってしまった。軍隊生活とはなにかを理解できるようになったのは二年兵になってからで、時既に



相撲大会、清は相撲が得意だった。

遅く、いくら演習に勤務に頑張ってもだめだったという。三年兵の後半になってやっと上等兵にしてみることができたが、「この時の人事曹長からお前を進級させるには随分苦労したと言われました。」と語っている。

武田班長は自分が初年兵の時に受けた教育の反省から、ビンタでは教育にならないと考えたようだ。教官自らがまずやってみせる。そして体で覚えさせる。ただしビンタはなしだ。

「してみせて、言ってみせて、させてみよ。」

褒めてやらねば人は動かず。」

これは山本五十六元帥の言だが、清の軍隊教育のモットーでもあった。滝澤氏の手紙によると、この方針は初年兵のうちでは好評だったようだ。が、概ね成功したかにみえた「ノービンタ」教育にも手強い兵隊がいた。

矢崎芳郎、二十五歳。早稲田大学を出て教職に就いていたが、召集されて暉春の山砲隊へやってきた。しかし兵隊用語でいうところの「まとまらない兵隊」で、なにをやっても人に遅れを取り、しまいには自分を見失ってしまったという。もともと兵士向きではない人間を兵士に仕立て上げること自体無理があったのだろう、武田班長の奮闘努力のいかにもなく、矢崎氏の初年兵教育は一年の後、さしたる成果もないまま終了してしまつたらしい。

(4)一九四二(昭和一七)年、二十四歳

▽一月一日 陸軍軍曹となる。

▽六月一日 山砲兵第七一連隊編入(略称八二四部隊)。

▽十二月一八日 初年兵教育助教として派遣のため暉春出發、同月二三日 新潟県高田市にある独立山砲隊第一連隊に到着。

この昭和一七年は関東軍にとって特別な年であった。陸海軍大本営は対ソ防衛を強化することを決定、さしあたって陸軍は内地にある二箇

師団と軍直部隊を動員して、関東軍に増員するとした。これによってその総兵力は約七十万人、馬約十四万頭、飛行機約六百機を有することとなった。満州の地はソ連との戦争を想定した戦地となつたのだ。軍はこの動員を関東軍特別演習(略して関特演)として一般には秘匿とした。

さてここで『山砲隊物語 山砲兵第七十一連隊第一中隊』の著者、陸軍大尉亀岡進一氏の登場である。亀岡氏はこのたびの東北大地震の原発で大きな被害を受けた福島県いわき市の出身。福島県立平商業学校を卒業後、新潟県高田にある独立山砲第一連隊に入営。昭和十五年、とあるから清より一歳下である。初年兵時代から気力体力旺盛な若者で、すぐに幹部候補生試験に合格、翌昭和十六年陸軍少尉に任官、十七年五月に関特演の動員で満州国暉春の山砲第七一連隊に編入されてやつてきた。

新潟県高田ならば新潟港から日本海を渡り、朝鮮北東部の港から満州国們まですぐの距離にあるのだが、亀岡少尉は輸送司令の任務を命ぜられて本州の鉄道を経由している。彼の著書から抜粋するところである。

「……総ての兵器を長町の貨物操作場で積載を開始する。昭和十七年五月二十二日、部隊は仙台駅前中央広場に集合した。東北本線・東海道線・山陽本線を経て、二十五日宇品に到着。同日輸送船に乗り込む。五月二十六日は釜山一泊、民宿であった。五月二十七日釜山出發。」

二十九日南陽に到着する。豆満江の橋を渡れば、満州図們である。豆満江の橋は国境であった。兵籍簿には、昭和十七年五月二十七日、国境通過と明記されるであろう。」

こうして、後に清の直属の上官となる亀岡氏は満州にやってきたが、暉春での二人の接触はほとんどなかったようである。部隊が違えば出会いもない。まして亀岡少尉は通信学生やら中隊長学生（？）やらで各地に派遣されている期間が多く、また清の方も初年兵教育係の任務で忙しい。また、結集した編成連隊による実弾射撃演習でも出会うことはなかったようだ。

昭和十七年も暮れようとする十二月、清は三年と九か月ぶりに日本に帰ることになった。亀岡少尉のいた新潟県高田にある独立山砲隊の幹部候補兵教育のため、選抜されて出向する。期限は三か月。亀岡氏と同じ行程であった。兵籍簿風に述べるとこうだろう。

「昭和十七年十二月十八日、初年兵教育助教として派遣のため暉春出発、同日、鮮満国境通過。二十日、釜山港出帆。二十一日下関上陸。二十三日、独立山砲兵第一連隊着。」

(5) 一九四三(昭和一八)年、二十五歳

▽二月六日 下関港出帆、同九日満州国暉春着、原隊復帰。

日本有数の豪雪地帯として知られる越前高田。

その冬場の十二月から翌三月までの教育隊の勤務。亀岡氏によると兵舎として体育館仕様の煉瓦作りの雨天練兵場があったそうだが、それでも雪中での教育もあり、馬の行軍など難渋したようだ。そもそも気候に恵まれた瀬戸内に生まれ育った清にとって、満州国境の暉春といひ新潟の高田といひ、寒い地方ばかりの兵隊勤務であった。

(6) 一九四四(昭和一九)年、二十六歳

▽一月一日 陸軍曹長となる。(一か月の休暇を与えられ、六年ぶりに岡山に帰郷。)

▽二月二五日 第五派遣隊山砲兵第一大隊に転属、同日暉春を出発。

▽三月一八日 マリアナ諸島「パガン島」上陸。

▽五月下旬 独立混成第九連隊に転属、山砲兵第一中隊(隊長亀岡中尉)の武田小隊長となる。

▽六月一八日 隣のサイパン島、米軍によりアスリート飛行場占領される。以後、パガン島は全島要塞化し、自給生活。

いよいよ、正念場の昭和十九年、この年は清にとつてまさに人生の分かれ目の年になった。天国から地獄、極寒の地から常夏の島へと、激動の一年である。

年が明けてすぐ曹長職の辞令を受けた。その

前日の十二月三十一日連隊長から呼び出され、何事かと思いきや、昇進とともにお祝いとして一か月の休暇を与えられたのだった。これは古参兵を対象に内地へ一時帰国を与えるという軍本部の通達のひとつで、軍事作戦に支障のない兵士に実施された。

清の場合はただの帰郷ではなく、「嫁取り作戦」という任務が隊長・副官より命じられていた。内地には前年に帰ってはいいたが、故郷の岡山は列車の窓から眺めていただけである。実に六年ぶりとなる岡山であった。

生家には両親とともに国民学校高等科に通う末の妹の朝子が残っていた。兵隊にとられてから、ずっと家には送金していたが、すぐ下の妹は嫁にいき、二人の弟たちも去年兵隊になって家を離れている。武田の家は上の二人の兄たちを合わせると、五人の男兄弟全員が出征兵士だった。父の八太郎は小柄なのだが、母の満喜が女ながらも大柄な方なので、男の兄弟は母親に似て体格がよかった。それにしても、せっかく久し振りの帰郷なのに、地区の幼友達は何も残っていないかった。

さて、「嫁取り作戦」、今でいうところの「婚活」のことである。この一か月後の二月二十一日、大本営による「ろ号作戦」なるものが発令されるのだが、軍隊というところは「なんとか作戦」という行動様式がお好きなようだ。清もこの任務を忘れてはいない。あと少しで二十六

歳になる独身の彼にもアテはある。それは前年次兄の竹次郎が結婚した、その嫁の妹が作戦のターゲットなのだ。

次兄は幼少期に他家の養子になっていて、家は児島湖の畔の八浜町にある。早速訪ねて行き、情報収集を開始する。兄嫁なる人とはこの時が初対面だったが、女優の「轟由紀子」似の明るい女性で、すっかり意気投合して実妹のことをあれこれ聞きだすことに成功した。もともと、それは持参した一本の羊羹が功を奏したからかも知れないが。

目指す「兄嫁の妹」は児島（現倉敷市）下の町で呉服店を営む旧家の末娘だという。すぐに作戦実行に移り、養家から自転車を借り受ける、才の峠を越えて一路児島の町に突入する。

家はすぐ分かった。しかし、呉服店の人々は驚いたことだろう。突然の、見知らぬ兵隊さんの来店である。この戦時下に何用かと思わない方がおかしい。その時の清の印象は後々まで語り草になった。兵帽からもうもうと白い湯気が上がっていたというのだ。それでも、嫁にいった三女の義理の弟とわかり、座敷に通された。

が、一通りの挨拶が済むともう会話が続かない。「あの、末の娘さんは」と切り出すと、今風邪で臥せているという。「ではせっかくなので、お見舞いだけでもさせてもらいたい」と強引に談じ込んで、兄嫁の妹である「角南秋野」なる女に会うことに成功したのだった。「見合い」が

「見舞い」になってしまったが、そんなことはどうでもよい。清は角南家の好意的な対応に満足していた。もともと、これも持参の羊羹の助力も大きかったにちがいない。その頃になると、砂糖などなかなか手に入らない貴重品になっていたからだ。

一か月の休暇を終えて厳冬の満州に復帰したのは二月初旬だった。その時分には関東軍の大規模な南方移動が囁かれていたが、実際の発動は二月二十一日、大本営の東条英機新参謀総長の就任を待って「ろ号作戦」という名で行なわれた。次の表は『関東軍全戦史』からのもの。

暉春にあった山砲兵隊の大部分は第五派遣隊となり、一部の兵は台湾へ、残りはそのまま満州に残留となった。（残留組は敗戦後シベリア抑留。）どの組になるにしてもそれぞれにリスクはある。それにしても、同じ関東軍でも派遣隊の行き先によって、文字通り天国と地獄の差があった。

第一派遣隊……当初はボナベ島、後サイパン島に変更。一九年七月六日玉砕。

第二派遣隊……モートロック島へ。敵の上陸なく終戦。

第三派遣隊……エンダービー島、一部はトラック諸島。防衛しつつ終戦。

第四派遣隊……ヤップ島へ。敵の上陸なく終戦。

第五派遣隊……パガン島へ。敵の上陸なく終戦。

第六派遣隊……グアム島へ。一九年八月下旬玉砕。

第七派遣隊……メレヨン島へ。敵の上陸なくも飢餓との戦いで七〇％死亡。

第八派遣隊……トラック島へ。敵の上陸なく終戦。

これら派遣隊は前もって行き先が知らされていたわけではない。もちろん、派遣隊長および各歩兵隊や山砲隊、工兵隊の隊長クラスには南方のどの島ぐらいいは分かっていただろうが、その下位の中隊長には作戦の目的はおろか、どこに上陸するのかわかっていたいなかった。そのまた部下の兵や下士官には勿論のことである。

昭和十九年二月二十六日の夜七時、暉春の駅に集合した山砲一大隊が釜山へ向けて出発していった。三日後の二十九日、釜山港には輸送船高岡丸ほか大型貨物船が数隻、港の埠頭に横着けされていた。これから大量の兵器や物資を積み込み、横浜に向かう。そこから太平洋各島に輸送する他の船舶と船団を組んで南下するので。

清は釜山の駅から「嫁取り作戦」の角南秋野に簡単な葉書を出しておいた。もう二度と日本の地を踏めないかも知れないという覚悟だった。「小生、この度南洋の方へ移動する事と相成り候。就いては貴女には他に良縁があれば是非、お受け下されたし。時節柄、お身体ご自愛下さい。」

この軍用ハガキは数日後、角南秋野本人では

なく、その母親の手に渡っていた。内容が簡潔すぎてよく分からないが、つまり「南方の戦地に赴くので命の保証はない。だからわしに構わず、他に誰か良い相手がいたらその男と結婚してくれ。」という意味なのだろうか、と角南家では首を捻った。そもそもあの義弟だという兵士はなにをしに来たのか、全く理解できていなかったのだ。この話は終戦後に続く。

三月十二日夕刻、いよいよ東京湾を出て一路南方へと船団は進んでいく。行き先はまだ不明だ。この時初めて山砲隊第一中隊総員約百二十名が甲板に集合、隊長亀岡進一中尉とともに見納めとなる内地の夕日を仰いだのだった。翌十三日未明、船団の先頭を行く護衛艦の二等巡洋艦「滝田」と輸送船一艘が敵の潜水艦の雷撃を受けて沈没、すでに戦場に出たのだという衝撃が走った。が、それ以上の攻撃はなく、また再び船団は元の体形に戻り、南下を続けた。途中、やつと行き先が告げられたのは三月十五日、目的地パガン島に着く三日前のことだった。

昭和十九年三月十八日、マリアナ諸島の一つパガン島に上陸。木更津沖を出帆してから七日目、奇しくもその日は清の二十六回目の誕生日だった。

「わしはついでとる。これは生きて帰れるという啓示じゃ。わしは絶対この島から生還するぞ。」そう確信したのだという。清らしい独り善がりな思い込みだったが、これが彼をして生き

る支えとなったのだった。

パガン島は小笠原諸島からさらに南下したマリアナ諸島の一つであり、その任務は「サイパン・テニアン航空基地群の一環とし、特に小笠原地区集団との連携基地として最も堅固に守備し、これを確保する」(第三十一軍防備計画)こととある。パガン島の南百二十キロメートル地点にはサイパン、テニアン、グアムなどの僚島が連なつて浮かんでいる。しかし、よほど詳しい世界地図でもない限りこのパガン島の名前は載っていない。それほど小さい孤島なのだ。

私は亀岡氏や滝澤氏の戦記を読むまでは南洋の孤島＝無人島だと思っていたが、ここには隣

のサイパン島から渡ってきた日本人や現地人(チャムロ人)など数百名が住んでいたという。

戦闘が激しくなると、彼らは奥地の山岳地帯に移つたらしい。島の中央部には東西六百メートルの飛行場があり、その北側に住民部落があつて、小さいながらも警察の駐在所や小学校の分校(いずれもサイパンから派遣)も設置されていた。これらの建物は敵の飛行場攻撃の時に悉く吹き飛ばされることになる。

さて、パガン島上陸時の第五派遣隊(第七十一兵団、後に独立混成第九連隊)の編成は次の通りである。

連隊長 天羽(あもう)馬八大佐

山砲兵大隊隊長 木滝

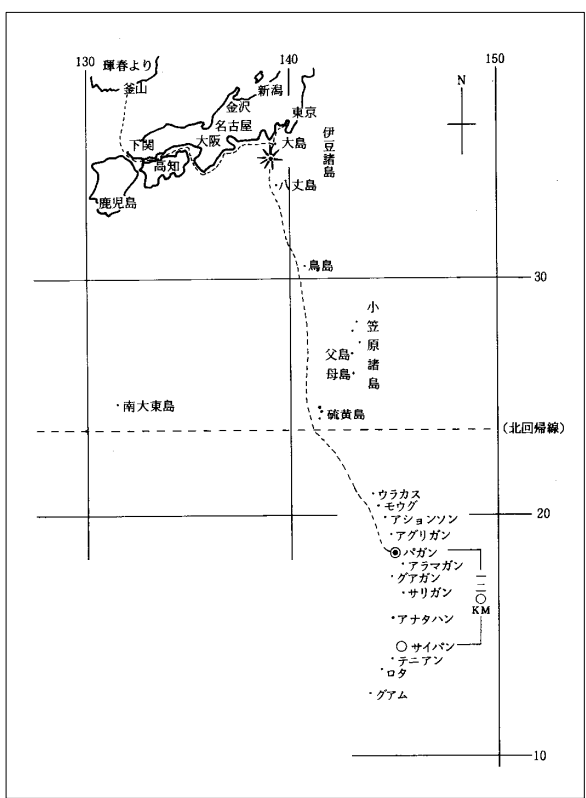
長壽少佐

山砲兵第一中隊長

亀岡進一中尉

連隊には他に歩兵隊、高射砲隊、工兵隊があつて、総勢約二千名の兵力である。

陸軍が上陸する前に既に海軍の警備部隊約二百名が本島に着任しており、初めはその兵舎や格納庫などを借用することになった。(もともと、南太平洋は海軍の守備範囲にあ



り、戦闘序列によるとこの派遣隊は海軍の連合艦隊司令官の指揮下だったため、それを知っていたのか海軍兵士たちの態度はきわめて冷淡で非協力だったとか。

山砲隊は第一、第二、第三中隊があり、それぞれ砲八門を持ち、一門に付き小隊長以下十三名の兵士で構成された。清の属する第一中隊は敵の上陸地点と予想されるアバン湾周辺に配置されることになった。亀岡中隊長は「基幹中隊として名譽このうえもなかった」というが、

山砲の配置は戦闘で若干の移動があったが、概ね次のようになる。

山砲兵第一中隊 隊長 亀岡中尉
本部（ガケ山陣地）・・・飛行場そばの山裾
中隊機関 曹長職 大滝軍曹
観測 横山軍曹

通信給与

- | | | | |
|--------|-----|-------|------|
| ①小林小隊 | 小隊長 | 小林少尉 | 斎藤伍長 |
| ②奈良小隊 | 小隊長 | 奈良少尉 | |
| ③八津小隊 | 小隊長 | 八津少尉 | |
| ④沼崎小隊 | 小隊長 | 沼崎少尉 | |
| ⑤安部小隊 | 小隊長 | 安部准尉 | |
| ⑥佐々木小隊 | 小隊長 | 佐々木准尉 | |
| ⑦武田小隊 | 小隊長 | 武田曹長 | |
| ⑧大貫小隊 | 小隊長 | 大貫曹長 | |

島の上陸後二か月ほどは比較的のんびりと飛行場の拡張工事やら各自の小隊の陣地作りに、あるいはサイパン島に物資や機材の受取りにと、

来たるべき戦闘に備えて準備に励んでいた。

滝澤氏が初年兵時代の武田班長に出会ったのはそんな日のことだった。あの劣等兵（自称）だった彼はもうすこしで伍長に足がかかるまで追い付き、連隊本部の通信係として上官に認められるまでになっていた。現代風というと、大会社の新人研修で世話した後輩が本社の情報部で活躍し、一方の武田先輩といえ九州は福岡支店の崎守（さきもり）営業所の所長といったところか。それでもこの孤島での再会は嬉しかったのだろう。

「崖山陣地の武田班長の元気な姿を本部で時たま見た時は懐かしく涙の出る思いでした。班長はいつも変わらず、笑顔で『元気か』と声をかけていたこと忘れません。」と滝澤兵長は書いている。

しかしこうした穏やかな日々は五月末に敵攻撃機が一機、学校裏に相当数の爆弾を落としたり軍参謀が飛来し、戦況が急を告げていることが明らかとなったのだ。飛行場の拡張工事は直ちに中止、各小隊は陣地構築に向けて、工事を本格化させる方針に変更。亀岡中尉は言う、「上級部隊（サイパン・グアム）から遠く離れ、また大本営の判断や海軍の情報等に全面的に依存していた本兵団が、前面の緊迫した状況を把握出来なかったのはやむを得なかった。」と。

六月十二日午前、突如として大群のグラマン

艦上攻撃機が島を襲った。中心部の飛行場、格納庫、兵舎、海軍の輸送機などが目標だ。上空にはB24らしき爆撃機、その下方にはロッキード教練機が旋回している。我が軍からは飛行場そばの高射砲隊、崖ぎわの海軍機関砲が応戦、さかんに撃ち合っているらしい。その日は一日中攻撃、翌十三日、十四日も連日猛攻撃に曝され続けた。

夜、大隊本部から連絡が入る。いよいよ明日十五日朝バガン島上陸とのこと。おそらく敵は正面のアバン湾、シャムソン湾あたりからの上陸だろう。亀岡中隊長は各小隊長に現状を説明し、決戦体勢をこまごまと命じた。

(一) ガケ山小隊（小林、奈良）二門、武田小隊一門、八津小隊一門は上陸用船艇が水際に到着直前より射撃開始。安部・沼崎・佐々木小隊の三門は敵水際より前進を開始すれば開始せよ。大貫小隊は別に指示する。

(二) とりあえず二日分の食糧を準備せよ。

(三) 温存中の酒で、別れの杯をせよ。

(四) 上陸後戦況不利となれば、安部・沼崎・佐々木小隊は大隊本部の指揮に入り行動せよ。

(五) 敵上陸時期まで、小隊長、分隊長、電話機を離れるな。

この時がバガン島ガケ山陣地最大のピンチだった。決戦を前に武田小隊長はどんな訓辞をしたのだろうか。敵が上陸するとなれば、どんなに抗戦したとしても玉砕は時間の問題だろう。

それが判っていても、戦わなければならない。最後の砲弾を撃ち尽くすまで。それが戦いだ。長い長い一夜が明けた。結局、敵は上陸してこなかった。B24の空襲は相変わらずだが、ともかくもガケ山陣地は無事だった。

攻撃の重点はサイパン、テニアンに向かっているようだったが、大隊本部付きの通信兵である滝澤兵長にも状況は知らなかった。いや知らされなかった。

この六月十五日を境として、僚島サイパンとは一切つながりを無くしてしまった。一度だけ、破壊されてぼこぼこになった飛行場に不時着した味方の飛行機があった。九名の搭乗員は幸い軽傷だったが、その兵隊たちの話からサイパン島の惨状が伝わった。ほぼ、玉砕は間違いのないらしい。

サイパンからの物資が途絶えたことで、全島あげて食糧自給体勢に入った。この島には椰子の木が繁茂していて、その椰子の実から油がとれた。また、島中に食用かたつむりが湿地や草むらにうようよするほど生息していた。また、島民から分けてもらったさつま芋の苗を増やして各部隊に分配、島を開墾して芋畑を作った。椰子の実、かたつむり、さつま芋、この三つの食糧がなかったらおそくこの島はメレヨン島などのように多くの餓死者を出しただろう。その意味でいうと、この島に派遣されたことはまさに「ついていた」ことになる。

沖の海岸に戦闘機の破片が流れついた。武田小隊の陣地のすぐ下、みると水槽にびつたり形をしている。上空のグラマン機が去るのを見計らい、小隊長自ら海に潜って岸まで引き上げた。その後は他の兵隊たちが砲台陣地の裏手まで運んでいった。この鉄製の「水槽」は毎日のようにやってくるスコールの雨水を貯めておくのに重宝した。ほかに崖で拾った鉄板は、海水を煮詰めて塩を作るのに役立った。この自家製の塩はよその部隊にも配って喜ばれた。また、海岸そばの陣地という地の利を活かして、「お魚ちゃん作戦」(?)と称する魚捕獲作戦を行なった。といっても、たわいもない作戦で、つまり海上爆撃で魚が浮き上がってきたのを掴まえる、というだけのことである。初期の戦闘の頃はそれでもけっこう豊漁だった。が、魚のほうが島に近づかなくなり、この作戦は他の多くの作戦同様、失敗してしまった。

父の戦争ばなしの中で一番記憶に残っているのは「よその隊の迷い鳥」の話である。ある日、陣地の背後に広がるジャングの方から一羽の鶏が迷い込んできた。たぶん、どこか他の部隊が飼っている鶏と思われる。さっそく捉まえて食った。久しぶりのごちそうにありついて、皆一息つくことができた。と、半時ほどしてジャングルの方から見かけない兵隊がやってきた。何か用か、と言うと、このあたりに鶏が逃げ込んだのだが知らんか、と聞く。知らんね、と言う

と、そんなはずはない、確かにここに逃げたはずだと、ひつこい。武田小隊長がのっそり出てきて、あの馬鹿でかい声を張り上げて怒鳴った。「知らんもんは知らん。貴様はわしの隊が嘘を言うと思うとんのか。そんなに同じ兵隊どうしが信用できんなら、もう戦争なんかやっておられんわい。」

孔子のたまう「信なくんば立たず」ということだが、この話にはおかしな箇所がある。そもそも、よそ様の鶏を食ったのは間違いのない事実なのだ。それを隠ぺいしておいて、信用しないやらするやらの話をすり替えている。それでも何度も聞いたこの話の中に、不条理な戦争に対する父の密かな反抗精神があり、子どもながら私はそれを本能的に感じ取ったのだと思う。

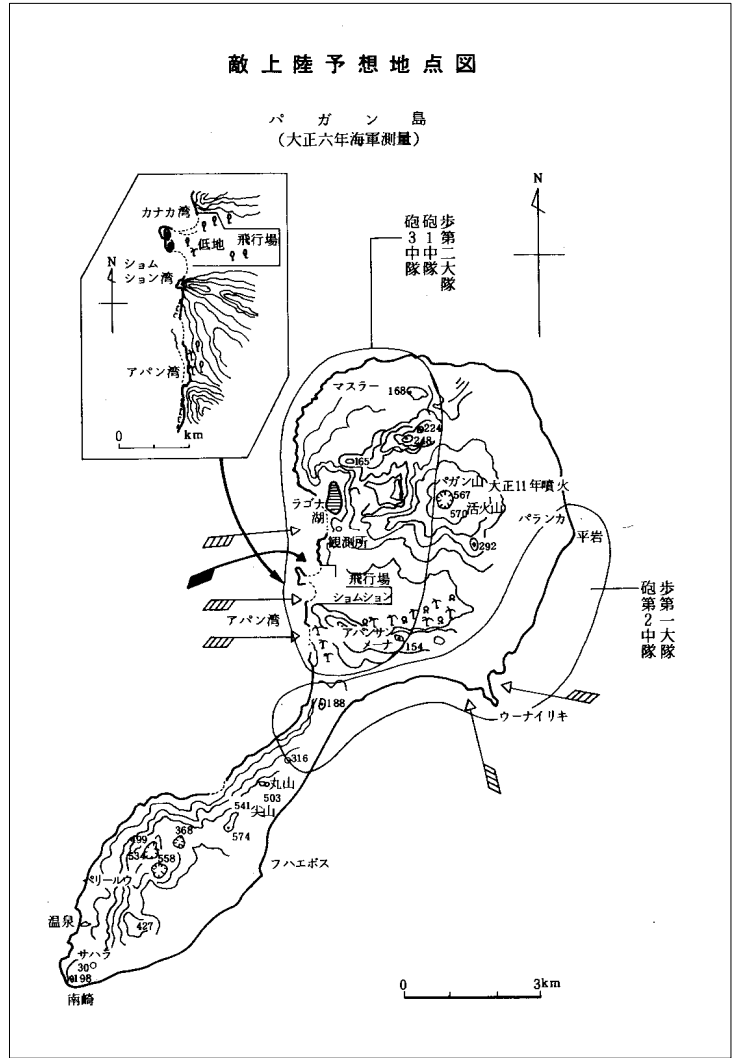
食糧増産とともに、陣地構築は依然として敵上陸の可能性があるととして続けられた。しかし、いくら戦記を読んでいても、この要塞構築の様子だけはイメージすることが難しかった。島の地形や地質が具体的に思い描けない。周囲十二キロ、飛行場のある平地は全長四キロとある。島唯一の上陸地点というアバン、シャムソン湾は軍かん島(というか大きな岩)をはさんでいる。山砲隊第一中隊はこの地点に八門の砲台を築いた。砲は剥き出しではなく岩壁の間から砲眼を覗かせる。となると、岩を掘って坑道を造ることになるが、これはかなり大掛かりな土木工事である。事実、中隊本部を兼ねたガケ山陣

地は岩盤をくりぬいて十五メートルもの坑道をガケ山の登り道に開けた。工事期間は四カ月、敵の攻撃がはじまったあの六月から一日も休むことなく続けた結果であった。

武田小隊はどうだったのだろうか。亀岡戦記によると、「比較的堅い砂盤である。作業は非常にやり易い。軍かん岩方面を射撃する陣地は完成間近であり、ひきつづきアバン湾方面を射撃し得る第二陣地の構築も指示する。」とある。かの

中隊長はやる気満々、完成した陣地に満足することなく、さらに第二の陣地追加を注文するのは、武田小隊もやれやれである。坑道の中は落盤に備えて、ジャングルに生い茂るメリケン松を切り出し、それを側面や天井に打ち付けた。柵原鉱山や大田銀山などの坑道を想像すれば、イメージがはつきりするかもしれない。

ここで『昭和の遺言 十五年戦争』から「アジア太平洋戦争 サイパンの全滅」の章を開け



てみよう。バガン島の砲配置はサイパンと似ている。それもそのはず、同じ築城専門の将校によるものだからである。

石原常雄軍曹はサイパン島第七中隊(野砲隊)の観測班に所属していた。六月十五日早朝、ヒナシス山頂に座砲を構えていた隊はずぐ近くの海岸に米軍海兵団が上陸するのを確認。いよいよよきた！しかしこの戦いは午前八時から十時までの二時間が勝負だったという。圧倒的な物量の差はもちろんだが、「これまで洞窟を利用してうまく所在を隠していたこちらの砲兵陣地が、戦闘開始とともに位置を知られ、狙い撃ちされはじめた」からでもある。その結果、第七中隊百三十名の中、生き残ったのは石原軍曹を含めわずかに七名だけだった。

もし、あの六月十五日がサイパンでなく、バガンだったらどうなっていただろうか。おそらく方が一にも生還の見込みはなかっただろう。

昭和十九年も終わりに近づく頃、毎日のように攻撃してきたB24機に変わって、B29機が島の上空に現れるようになった。それはサイパン島に「B29の本土攻撃基地を完成したことを裏づけるもの」で、その爆撃は翌年になると、さらにひどくなった。

(7)一九四五(昭和二〇)年、二十七歳

▽八月十五日 終戦。

▽十月二十日 バガン島出帆、同月二十六日

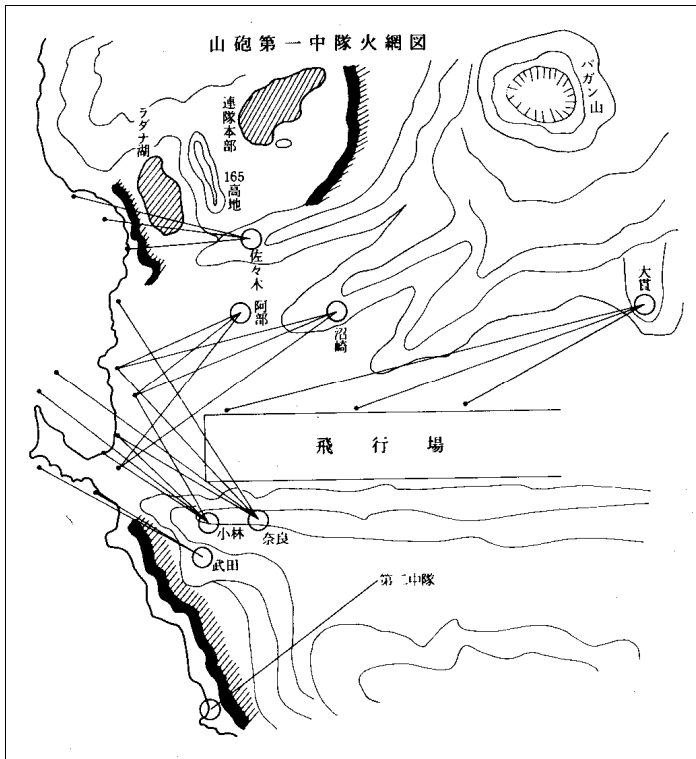
浦賀港上陸。

▽十月三十日 現役満期除隊。

マリアナ諸島の中で、サイパン島、テナン島、グアム島と次々に玉砕して、いまや敵の上陸がなかったのは、ロタ島と我がパガン島のみとなった。翌昭和二十年三月に硫黄島が陥落してからは、「戦術的には多少の価値があったとしても、戦略的には何の価値もない遊島と化してしまった」(亀岡氏の話)パガン島ではあるが、

さらに予備陣地の構築、そして実戦訓練は続いていた。

B29機は相変わらず島の上空を飛んでいく。それも西の空が暮れる頃になると、空中が真っ黒になるほどの隊列を組んで飛んでいく。その銀色一色の大型爆撃機をガケ山の壕から眺め、清はなげなしのタバコをゆっくりとふかした。あいつらは日本に向かっていて、そして本土の各地を爆撃しやがっているんじゃないか。ふと、郷里に残した末の妹のことを思い出した。あれは



女学校に進学したいと言っていたが、どうしたかないや、勉強どころじゃないか。岡山の街だって空襲でどうなっていることか。そんなとりとめもないことを考えたりした。そのB29は朝方になるとまた隊列を組んで、決まったようなコースに帰還してくる。そして本土空襲に使った爆撃弾の余りを島の平地や芋畑に落として飛び去っていった。八月十六日、突然連隊本部から招集を受けた亀岡大尉はガケ山中隊全員を集め、日本が無条件降伏

したことを伝達した。あつけなくというか、やつとというか、ともかく戦争は終わったのだ。た。

パガン島に上陸してから一年五か月、その間の死亡者は二七九名(戦死、戦傷死一〇一名、戦病死一六七名、公傷死二名、自殺八名)となっている。約二千人の全兵士の中、この数字は少ないとみるか、多いとみるか。

敗戦後の復員は早かった。『あの戦争 太平洋戦争全記録 産経新聞社編』によると、復員には優先順位がつけられたという。最優先は太平洋上に孤立して飢餓に苦しむ島々。〃餓島〃はガダルカナル島だけでなく、ウエーク島、マーシャル諸島のミレ島、そしてメレヨン島(オライ環礁)など、凄まじいほどの飢餓に苛まれた島々である。パガン島はまだましな島ではあったが、飢えに苦しんだことはまちがいない。それが比較的早く復員出来た要因だろう。

三、兵隊からただの人間に

戻ってからのこと

岡山駅に帰り着いたのは日暮れ時だった。昭和二十年六月の岡山空襲にも焼け残った出石町の家で、両親と末の妹が待っていた。家族は幽霊でも見たような表情で、復員した清を見つめた。無理もない。秋口だというのに夏用のくたびれた軍服、真っ黒に日焼けして頬のこけた顔。これが一年前の元氣だった関東軍の軍人だろう。

か、と思うほどだった。しかしそれでも生きて還った、それだけで充分のはずだった。武田家は男兄弟五人が動員され、五人とも無事に復員してきた。一度に息子たちが戻って、ただでさえ疎末で狭い我が家がバンクしそうだとも母親は贅沢な悲鳴をあげていた。

次兄の嫁は、南洋の激戦地から還ってきた義弟を「強運の人」だと言った。確かに、あの激しい戦いの地で生き延びたことは「運」が良かったとしかいいようがない。兄嫁は「ついていた」義弟の味方になって、自分の妹である「角南秋野」との結婚をまとめてやった。

母は私たち娘によく言っていた。「お父さんのこと、好きでも嫌いでもなかったわ。だって一回しか会ったことなかったし、それも病気で寝ている時のよ。ろくに顔も見えてやしない。それを静ちゃんが強引に勧めるもんだから……。」

私たちは静野伯母さんに感謝すべきなのか、それとも余計なおせっかきするなとたしなめるべきなのか、それとも……。

父は一度も戦友会なるものに出席したことがない。復員後の生活が忙しかったのか、何なのかよく判らない。しかし、戦後四十年ほどして突然、「戦友」から手紙がくるようになった。ほとんどが長野県や山梨県、福島県などといった東北からである。(父の属していた部隊には東北人が多かった。)その中でも、とりわけ父を喜

ばせたのが初年兵時代に指導した「矢崎芳郎」氏からの手紙であった。矢崎氏はなんとか軍隊生活を続け、師団兵器勤務隊に移って、終戦時はその部隊とともに台湾にいた。内地には翌二十一年三月に帰還、長野県で高校教諭をして、先年退職したところだという。彼は軍隊時代、父にオーバーコートを譲ってもらったが、部隊が移動したために未だに代金を払っていないのが心苦しい、と書いてあった。

ある時、我が家に大きなダンボール箱に入った林檎が届いたことがある。「やっぱり、本場長野の林檎はうまい」と言って、みんなで食べた記憶があった。あの時の林檎が軍用防寒服の代金の代わりだったのだ、と今この文章を書きながら思い当った。それにしても瑞々しい林檎だった。母はそ知らぬ顔をして食べていた。

(たけだふみ)

参考文献

- 佐藤寛二『赤いチューリップの兵隊 ある兵士の足跡』私家版、一九七八年
小田敦巳『一兵士の戦争体験(ビルマ戦線生死の境)』私家版、一九九八年
中山隆志『関東軍』講談社、二〇〇〇年
『関東軍全戦史』新人物往来社、二〇〇一年
亀岡進一『山砲隊物語 山砲兵第七十一連隊第一中隊』私家版、一九八五年
亀岡進一『山砲隊物語 パガン島その後』私家

- 版、一九九一年
仙田実・仙田典子『昭和の遺言 十五年戦争』文芸社、二〇〇八年
中島達二『満州の思い出』私家版、一九七六年
滝澤國男『パガン島守備隊』私家版、一九八二年